In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	(第 10 章)社会的企業と都市･地域再生 ： 「働く」とは
Author	今井 浩人
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 1 巻, p.70-72.
Published	2015-03-30
ISBN	
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	市大都市研究の最前線 ： 地域実践連携講座の試み
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

「働く」とは

今井　浩人

株式会社浜田は大阪府高槻市に本社を構え，金属リサイクル事業，産業廃棄物処理業を中心に，40年間事業活動を営んできた。近年ではバッテリーリユース，太陽光発電のようなエネルギーソリューション事業にも取り組み，地球環境や地域，企業の「困りごと」を解決する「環境ソリューション企業」を合言葉にさらなる事業拡大を目指している。

今季はCSV経営を目標に掲げ，本業だけでなく，地域へのCSR活動，採用に至るまで，経営活動を通していかに社会に価値を与えられるかを考え，お客様向けの産業廃棄物セミナーの開催や，地域の田んぼを使った米作りプロジェクト，学生への教育支援型インターンシップ等，新たな取り組みに挑戦している。

「働く」を本質的に考えると，必ず「人間は何のために生きているか？」という問いに直面すると思う。個人的には「生まれたからには仕方ないじゃん」と言いたくもなるが，あえて定義するなら「人生における充実感・満足感を得るため生きている」ということになると思う。

では「働く」とは何か？　それは「人生の選択肢を広げる」ということである。例えば，年収１億円の人が昼食代に１万円使える状況で，数多ある選択肢の中からコンビニで300円のおにぎりを食べることと，年収300万円の人が昼食代に500円しか使えない状況で，少ない選択肢の中からコンビニで300円のおにぎりを食べることとでは，明らかに前者の満足度の方が高い。

我々は，働くことで人生の満足を得ているのである。

ただ現実として，これから社会に出る学生の中には「働くことに希望が見出せない」という人が多いと思う。なぜ働くことにネガティブなイメージを持ってしまうのか？　最近世間を騒がせているブラック企業等のニュースの影響もあると思うが，一番は自分の身近な社会人から受ける影響が大きいと思う。例えば自分の両親，親戚，大学の講師など，実際に社会で働いている彼らの目が輝いていなければ，学生が働くことへ希望を持てないのは当然である。

ではどうすれば学生が働くことへの希望を持てるのか，私の答えは単純で「楽しく働いて，目が輝いている社会人との交流を持てばよい」と思う。人は良くも悪くも周りに影響される生き物なので，自分の周囲に目が輝いている社会人

がいれば，それだけで学生は働くことへの希望を持てるのでは，と考えている。

さて，そんな学生もほとんどが“就職活動”を経て社会に出る訳だが，経済産業省の調査によれば，企業が学生に求めている能力と，学生が自分自身に足りないと思っている能力には大きなギャップがある。

企業が学生に足りないと思っている能力をピックアップすると，“粘り強さ”，“チームワーク力”，“主体性”，“コミュニケーション力”の４つが上位にランキングしている。一方学生は，上記4つの能力については「十分に備わっている」と自己評価しており，逆に自分に足りない能力は“ビジネスマナー”，“語学力”，“業界専門知識”，“PCスキル”だと考えている。我々企業側からすると，ビジネスマナー等の能力は入社した後でも身に付けられるので，正直どうでもよい。欲しいのは，「仕事を遂行するために必要な人間的基礎力」であり，決してビジネスマナーなどではない。

なぜこのようなギャップが生じるのか？

一つは，学生自身の評価軸が“自分”だということが挙げられる。企業で働いたことの無い学生からすると，単に“コミュニケーション力”と言われても，企業がどのようなコミュニケーション力を求めているか分からないので，せいぜい「友達を作る力」ぐらいにしか捉えられない。そのような学生が自分や仲間同士でお互いを評価しても，正しい認識など生まれるはずがない。そして結局，自分たちが理解できる目先のスキルに焦点を当てることになってしまう。

もう一つの原因は“大学と企業の連携不足”だと思う。大学を卒業してそのまま大学職員になった方は，一般的な“就活”を経験していない。しかし，そのような方々が学生にキャリア教育を行っている現在の状況で，学生は社会で活躍できる力を養うことができるのだろうか？　当たり前だが，人は経験の無いことを他人に正しく教えることはできない。本来は，我々企業側が大学と連携して学生の教育を行うべきなのだが，諸々の事情からそれには至っていない。決して，大学キャリアセンターの方々を批判している訳ではない。現在の大学と企業間にある考え方の違いに根本的な問題があるのだと思う。

では，そのような状況の中，学生はどうすればよいのか。どうすれば企業が求める力を養うことができるのか。私の答えとしては，まずは「行動すること」，そして「社会人との接点を多く持つこと」が必要である。最近，自分では行動しないが人の行動に対しては口出しする，いわゆる評論家タイプの学生が多い。社会では「戦略×実行度」で成果が評価される。つまり，口先だけで行動しな

い者は評価されない。情報が蔓延する現代では，インターネットをクリックすれば欲しい情報が瞬時に手に入り，さも自分がそれを経験したかのような錯覚を起こす。しかし，“百聞は一見に如かず”という言葉があるように，自分で経験せずにインターネットから収集した情報は酷く脆弱だ。そのような情報で武装していても，面接で質問するとすぐに化けの皮が剥がれてしまう。

私が学生に期待することは，行動することで経験を積むこと。その経験とは“社会人から評価される経験”である。異業種交流会に参加するも良し，企業のインターンシップに参加するも良し，とにかく社会人から評価される場に自ら足を運んで，自分に足りない能力や自分が人に誇れる能力を経験値として感じてもらいたい。そこで得た気づきこそ，我々が学生に求める能力に他ならないからだ。